

▶ ペトラ博物館  
外観

ヨルダンの首都アンマンのはるか南に位置するペトラ遺跡は、約二千年前に、隊商の民ナバテア人が、主に自然の岩壁を掘ってつくった都の名残である。掘ったからこそできる装飾は細部まで美しい。しかし、そんな精巧な技術を持ち数百年栄えたナバテア人の文化や暮らし、成り立ちは未解明の点も多く、地域住民にとっても謎に包まれている部分が多いよ

## ペトラとは何か、 そしてナバテアという民族とは

—— ペトラ遺跡を訪れたことが無い日本人も多いと思います、まずお二人から見たペトラの魅力について教えてください。

（大山）ペトラは1985年に世界文化遺産に登録されました。それは日本でいう富士山のように、ヨルダンのシンボリックな文化遺産であると思います。そしてペトラと周辺地域には聖書の世界に関連した文化遺産も残されており、巡礼の一環で訪れる人もいます。しかしながら、古代都市ペトラの一角は、キリスト教ともイスラームの文化とも異なる、ナバテア王国の歴史を含む様々な時代背景を反映させた独自の歴史文化を残す地域です。UNESCOが評価したOUVにおいても、そういった様々な歴史的背景

# JICA協力による ペトラの地域博物館と 持続可能な地域づくり

取材・文

NPO法人 世界遺産アカデミー  
客員研究員 飯島 一隆

うだ。さらに映画「インディ・ジョーンズ 最後の聖戦」に登場したことで、いつしか地域の土産物屋には、古代のペトラの名前「ラクム」よりも映画のタイトルの方が並ぶようになってしまった。

今回は、そんなナバテア時代やその前後を含めた地域の歴史を再び掘り起こし、地域博物館で伝えていくことで、地域のアイデンティティの再発見にもつながる活動を行ってきた**大山晃司氏**と、その後観光を活用して持続的な地域発展に繋げるためのマスタープランの策定を大山氏と共に支援した**熊田順一氏**、JICAプロジェクトの専門家として携わった二人に話を伺った。

が表現されています。私は1990年代末から長年に渡ってヨルダンに住み、主に博物館活動に従事してきましたが、こうしたまだ公に知られていないペトラの魅力を間近に感じ、その魅力に憑りつかれた一人かも知れません。

（熊田）特に知られているのは、ハリウッド映画の一部で使われたエル・ハズネ（宝物殿）と呼ばれる岩窟墓ですが、この辺り一帯は“生の世界”を意味する中心部と“死の世界”を意味する外縁部を含んだ砂漠の谷が広がっており、エル・ハズネの他にも寺院、教会といった様々な建築物を含む、広範な考古学的遺構が織り成しています。そしてこれらを結ぶのが、シークと呼ばれる峡谷です。観光ルートで一般的な入口となるのはワディ・ムーサと呼ばれる村で、旧約聖書の出エジプト記で、預言者モーセがこの地域を通過したという伝承に由来しアラビア語で「モーセの谷」を意味します。このワディ・ムーサから狭いシークを抜けて、突然に眼前に広がるエル・



▲ ペトラ全景



● シーク

ハズネを見上げると、それは確かにここにしかない世界感を味わうことができますね。

（大山）そうですね、その演出効果は先の映画によって現代の人々にも視覚的に印象付けられていますが、そもそもナバテアの人々が自然によって造られた地形を巧みに読み込んで利用した、“人為的に”造られた景観なのだと思います。この辺りは大地溝帯の一部であるヨルダン地溝帯として、ガリラヤ湖、ヨルダン川、死海を経て、アカバ湾までに達する低地となっています。ペトラ遺跡は低地の東側に広がる高原の中にありますが、高原地帯の裂け目に雨の流れと風化によってシークが形成され、そこを歩くと、両側がカンブリア紀の砂岩が迫りくるような地形に加えて、赤みを帯びた色合いの岩肌のため、「薔薇色の都市」とも表現された美しい景観を目の当たりにすることができます。

（熊田）確かにUNESCOとペトラ開発観光庁（PDTRA）はこのシークの景観とこのエリアの訪問者の安全を守るために、長年に亘り地形を計測したり、場所によってはバリアを張ったりしていますね。観光客も歩く道が多いので、安全の面からも場所によってはバリアを張ったりしていますね。

—— ペトラの魅力は遺跡等の建造物だけでなく、シークと呼ばれる谷間の道や景観の美しさも含めての魅力だと認識しました。ナバテアの文明や文化についてもう少し詳しく教えていただけますでしょうか。

（大山）ナバテアの文明や文化は、紀元前2世紀頃から紀元後1世紀前半まで栄え、約300年続いたナバテア王国時代が中心となります。彼らはもともと遊牧民でしたが、周辺のローマなど地中海世界、古代エジプト、メソポタミア、アラビア半島を結ぶ、キャラバン貿易によって富を成し、王国時代にペトラ一帯に定住し、大きな都市が形成されていきました。

特徴的なのは水利システムです。シークには、ナバテアの人々が使っていた水道管が残されています。一つ30cmくらいの長さで、遠方の泉からわずかな傾斜をつけることで、水道管を通して水が流れる工夫をしてきました。これは地元で作られた土器で出来ており、その焼いた窯も発掘されています。レーダーによる測量技術もなかった時代において、うまく地形の高低差を読み取ることで、高地にある泉から低地の都市部に向かって水が流れていく水利システムを整備し、二千年経った今でも、ワディ・ムーサにあるモーゼの泉や、段々畑に繋がって、水はペトラの中心部まで大地を潤し続けています。

水利システム以外にも歴史、交易、宗教の観点で様々な特徴を持っていますが、住空間にも面白い特徴があります。イタリアのポンペイの遺跡のようなものに少し近い印象がありますが、壁画が独特なのです。幾何学的な文様が描かれていますが、後の時代のイスラーム文化に見られるものとも似て非なる文様です。そして、部屋の内側には、なんとギリシア・ローマ世界のようなファサード等といった建造物や、扉等が描かれているのです。自然や風景に関する絵画やレリーフなら多くの事例があるかと思いますが、写実的な扉や建築の外観を大きく描いた壁画はユニークであると思います。なおこうした住居は、住居そのものが洞窟の中に造られている場合があります。

## JICAによるペトラ博物館建設プロジェクトについて

—— 大山さんがJICA専門家として関わられたプロジェクトの背景と経緯について教えてください。



● ナバテアの邸宅の内壁に描かれた壁画

（大山）ナバテア王国時代に限らず、この地域の人々の歴史や文化的背景は、実はこれまではあまり周知されてこなかったと認識しています。またヨルダンには日本のような博物館の法制度の整備や社会的役割の拡充は開発途上にあるといえます。ですから多くの博物館は、未だ考古資料がただ並べられているだけの状態と言っても良いでしょう。例えば、先ほどの水道管も、かつてはペトラ遺跡公園内にある旧博物館の中でショーケース内に展示されてはいましたが、ペトラの水利システムの一部としての解説もほとんどされていない状況でした。もちろん、それでも教科書には記載されていない内容があり、教育上も重要な可能性を持つ資料がある場所です。

一方、JICAとヨルダン政府は、2000年代初頭より、ヨルダン全体の歴史文化を扱う首都アンマンに新設された「ヨルダン博物館」や、石造の伝統建築が多く残り2021年に世界遺産登録されたサルト旧市街地にて、歴史的邸宅を改修して旧市街地の近現代史や民俗を紹介する「サルト歴史民俗博物館」、および同博物館を核として町全体を博物館とみなして各地の文化遺産をネットワーク化していく「サルトエコミュージアム」、また十字軍とイスラームの激戦地となったヨルダン南部の歴史的城塞都市カラクの地域博物館である「カラク考古博物館」、死海地域の自然・文化遺産を紹介する「死海博物館」等、複数の博物館の新設や改修がJICA通じた日本の支援で進められてきました。こうしたものを先行事例として、2013年よりペトラ博物館建設プロジェクトも文化無償資金協力を通じて始められ、私も携わりました。

ペトラ博物館は地域博物館を意識し構想しました。この地域には、例えばエジプトのツタンカーメンの黄金のマスクのような、いわゆる“目玉”となるような有名な博物館資料が少ないのですが、上述した水道管のように地域の重要な文化を語る資料は多くあるので、地域史を語るストーリー性を重視した

博物館展示を目指しました。また、ペトラ地域には、エル・ハズネのような岩窟墓に加え、ナバテアの水利システムの一部であった遺跡等も多く残されています。そこでこうした“地域に点在する多様な文化遺産”を、ペトラ博物館を核として地域の歴史文化に関わるストーリーで繋げてネットワーク化し、博物館や各遺産それぞれの「点」から、地域全体の「面」としての展開するようにもしたのです。プロジェクトでは、ストーリーの一部である「ナバテアと水」に関連して水利システムの一部を訪問するツアープログラム等を開発しました。この方向性はエコミュージアムの考え方に近いと思います。地域博物館としては、日本には県立、市立、区立博物館のような、地域独自の歴史文化を伝える博物館の事例が多くあったので、参考になったと思います。

—— エコミュージアムは1980年代にICOM（国際博物館会議）が提唱した考えで、日本でもこの考え方を取り入れている地域がいくつもあると認識しています。一方、地域博物館としてのペトラ博物館はどういったストーリーなのでしょうか。

（大山）我々 JICA プロジェクトはあくまで支援する立場なので、主体はヨルダンや地域コミュニティです。我々のカウンターパートはPDTRAであり、その先に地域コミュニティがいくつもありました。日本側とヨルダン側の双方で話し合い、ペトラの地域史を、先史時代から現代まで時系列で追う展示ストーリーとしました。その中でも、ナバテア時代のペトラについては重点的に扱っており、8つの展示ゾーンの半分に当たる4ゾーンをナバテア王国に関するものにしました。例えばナバテアの背景に水が重要であったことが最初に説明され、それを語る資料として水道管が展示される、そういう展示の仕方の工夫をしました。



● 博物館展示：ナバテアの住居や社会に関するコーナー

展示資料で興味深いものの一つが、「ペトラ」とギリシャ語で書かれた碑文です。実はペトラと皆言いますが、実際に「ペトラ」と古代の言語で書かれた実物資料をペトラ遺跡で目にする機会はこれまでなかったのです。

また、デジタルマップやAR化と言ったDXにも取り組みました。例えば実際はすでに枯れたライオンの噴水口が博物館に展示されていますが、その口からARのアニメーションで水が出てくるようなものです。

さらに、障がい者向けプログラムの導入など、ユニバーサルミュージアムの試みにも取り組みました。例えば手話での展示紹介ビデオを作成し、また視覚によらず触って理解する展示や、手話通訳を伴う館内ツアーも地元の障がい者支援団体と共に開発しました。障がい者向けのプログラムは、今ではヨルダン全域の博物館に広まりつつあります。

（熊田）一方、遺跡公園内の野外設置のWiFiとかの整備が困難でしたね。以前、設置後に盗まれてしまったり、壊されてしまったりしたことがあり、日本では考えられないような理由で整備が進まないこともありました。

（大山）そんなこともありましたね（笑）。博物館は開館後の活動が重要です。学校生徒を対象とした教育活動の実施に加えて、博物館に地域の学校の教師にも来てもらい、博物館展示を見ながら、博物館をどう活用してもらえるか共に考えるという活動も実施しました。博物館内で行う活動に加えて、アウトリーチとして博物館側がペトラ地域の村落部に向く出前授業も実施し、その一環で、ペトラ博物館のバーチャルツアーを博物館のウェブサイト通じて行いました。教育活動では見るだけでなく、ハンズオンの手法などを取り入れ、例えば乳香を実際に焚いてみたり、水道管を触ってみたりする工夫も行っています。



● 水道管（ペトラ博物館の展示の様子）

## ペトラ博物館から地域全体を回遊し、より広域の経済圏を目指す

—— ペトラはすでに多くの訪問者が国内外から訪れ、知られているかと思いますが、課題はあるのでしょうか。

（熊田）確かにペトラには2019年、2023年に年間で約110万人を超える観光客が訪れており、人気を博していますが、課題もあります。第一に、繁忙期にはワディ・ムーサやシークが大変な混雑でにぎわってしまうこと。特にワディ・ムーサから入って、エル・ハズネから戻ってくる観光ルートが一般的で、シークでは人流が往路と復路で倍になります。第二に、これらのエリアのみに観光客が集中し、その周辺には経済的な恩恵が少ないことです。特に紅海のアカバ港にクルーズが寄港する際は、特定の時間に集中して多くの日帰り来訪者が見込めますが、滞在時間も短いことから、ペトラ地域にほとんど消費が落ちない課題があります。

そこで、ペトラや周辺地域はPDTRAという、日本でいう行政と独立行政法人の間のような組織が管轄していますが、我々 JICAは彼らと共に、観光商品の開発や官民の観光関係者への意識啓発等、パイロット事業（実証実験）で実証された効果を踏まえ、ペトラ観光の付加価値を最大化し、持続可能な形で地域開発することを目指した支援を行うことにしました。

根幹となったのは、2021年5月から2025年2月まで、技術協力により実施した「ペトラにおける観光開発マスタープラン策定プロジェクト」でして、私も大山さんも、この間は何度も訪問し、中・長期滞在を繰り返しました。

この過程でPDTRAとは、例えば第一の課題については、エル・ハズネ観光後にワディ・ムーサに戻るのではなく、そのまま奥に進んで劇場や王家の墓、大神殿などを巡ってエド・ディル（修道院と呼ばれる岩窟墓）に登る手前まで一方通行に通り抜けるルートとすることで、混雑の解消と他の遺産に訪問する回遊性を高めることができると構想していました。そこでエド・ディルの登り口の手前付近からシャトルバスを走らせ、シャトルバスでワディ・ムーサまで戻る周遊コースを試みています。ただこの場合、土産物屋等はワディ・ムーサの入口部分に集中しているため、一方通行で観光客が抜けてしまうと購入の機会が減少すると反対を受けたこともありました。



● ペトラ中心部まで水道管を通した跡

—— 日本においても観光客の過度な集中は観光客の満足度を下げるだけでなく、地域住民への悪影響なども生じる可能性を秘めており、すでに課題の多い地域もあります。ペトラにおいては地域との関わりは考慮されたのでしょうか。

（熊田）はい、我々のカウンターパートはPDTRAのみならず、彼らが管轄していたコミュニティ（ベイダ、ウム・サイフン、ワディ・ムーサ、タイベ、ラジフ、ドラガの6地域）も含まれます。そのためマスタープランはPDTRAが主体ではありますが、地域住民や事業者が継続して実践・活用できるように、彼ら自身がコミュニティとの関わりの中で主体的にデザインし実践するように伴走しました。この考えはさらに、コミュニティの中に置いても同じだと思います。遺跡公園の玄関口であるワディ・ムーサに近いほど観光の恩恵がありますが、離れれば離れるほど観光に関心がないため、第二の課題である観光の恩恵を地域全体に裨益させるため、コミュニティに如何に主体的に関わってもらうかが、苦労しましたね。

どうしたら関心が高まるか。それには観光客に滞在してもらい、地域の暮らしを体験してもらうこと。そしてもう1泊してもらう機会に繋げるプログラム



▲エド・ディル（修道院）

提案が重要だと考えました。ペイダで実証したのは、ベドウィンのテント生活を体験してもらうことでした。そこでザルブといって、ドラム缶を地中に埋め、底に木炭を敷き詰めバーベキュー用の網を三段程度に入れる伝統的な料理が食べられるのです。味付けをした肉や野菜などを乗せ、蓋をしめて土中で数時間蒸し焼きにする、遊牧の負担となる調理器具が少なくて済み、家畜の世話の片手間で調理が終わるなど、遊牧民の知恵が反映された料理です。他にもラバーバという独特な一本弦の楽器の演奏体験もしました。

加えて、ワディ・ムーサではローカルマーケットとして、コミュニティが自ら動く形で、ベドウィンのテントを立てて地域の産品を販売する企画も行いました。

こうした取り組みは、最初はそれぞれ外から様子見する人も多かったですが、コミュニティによって様々ではありますが、徐々に、地域おこし協力隊のような方や、ガイド、古民家を経営している方々（コミュニティによって様々ではありますが）が、リーダーとして実践していききましたね。

（大山）その意味では、例えば先述の世界遺産登録されたサルト市では、もともとJICAによる観光支援を始めたものの、今では自分のギャラリーで自分のアートを飾って販売するなど、コミュニティ自らの意思で自立するようになったと思えることもあります。

ペトラ地域においても、土産物一つとっても、何となく中東っぽい仕様になっていますが、その由来がはっきりしないものも多かったので、ペトラ博物

館で紹介しているようなナバテア文化のアートやデザインを調べて冊子にまとめ、そうしたデザインを反映したような、ペトラ地域ならではの土産物を考えてもらうような働きかけもしました。

（熊田）そうですね、最後はコミュニティが自ら観光を活用した地域づくりを担うのが望ましいと思います。

ちなみにもう一泊してもらうという観点では、夜の体験コンテンツの造成も欠かせません。以前はペトラ バイ ナイトというナイトイベントがありましたが、キャンドルがただ並んでライトアップされるだけという厳しい評価を頂いたこともあり、最近はプロジェクションマッピングも活用してより深みを持たせることができました。もちろん、これによって+αの料金徴収や、満足度のアップにも繋がったと思います。

また、先に挙げたクルーズ客の日帰り問題については、ペトラに1泊、2泊する方が割安になるような工夫をするようアドバイスもしました。

▼JICA支援のもと開催したローカルマーケットの様子



## —— JICAによる観光マスタープラン策定プロジェクトの支援の仕方について、その手順など、もう少し詳しくお話いただけますか。

（熊田）背景と課題、対象地域は述べた通りで、手順としては、企業の競争力を分析する際の手法として広く用いられている“バリューチェーン・アプローチ”を観光に適用し、戦略プログラムと位置づけました。

具体的には、バリューチェーンに従って、観光地経営（DM）、研究・開発（RD）、商品開発（PD）、流通・販売（SP）、そして観光サービス（SH）の5つのプログラムに分け、それぞれJICAの専門家とコミュニティのメンバーで協議し、プログラムを実行し、全体として繋ぎ合わせるという手順です。例えば私はその全体統括を、大山さんはRDのプログラムを統括する考古学・博物館の専門家として活動しました。

またKPIとしては、5つの目標を立てました。一つ目はペトラを訪れる観光客の一人当たりの観光消費額。二つ目にペトラを訪れる観光客数。三つ目はペトラ地域の観光収入。四つ目はペトラ地域の観光セクターに従事する雇用者数（特に女性）。そして五つ目に環境面のアクションのモニタリングです。最後の環境とは、観光客が増えると廃棄物処理や水資源管理の課題に直面するため、廃棄物処理施設の改善や水の再利用等も強化する必要があります。

なお、これらのバリューチェーンやKPI達成のための基礎としたのが、観光によって持続可能な地域づくりにしていくための国際的な基準の活用です。具体的には国際的に知られているGlobal Sustainable Tourism Council（GSTC）というNGOが作成した観光地管理の基準です。観光地マネジメント・社会経済への影響・文化への影響・環境への影響の4分野で多面的に地域を把握するツールにもなります。

私はこの国際的な考え方やツールの使い方を、まずPDTRAの職員に、そしてバリューチェーンの各プロジェクト関係者にインプットしました。その後、GSTCから専門のトレーナーを招聘し、ペトラ周辺

地域にはフェイナンエコロッジという環境にも配慮した宿泊事業者がいるのですが、彼らに運営手法をベースに、同施設の代表の体験を織り交ぜながら、GSTCが主催するトレーニングを、アラビア語でペトラ地域の関係者に受けてもらいました。

こうした地道な学びと実践の繰り返しでバリューチェーンの各プログラムを成功させ、PDTRAがその後実施するすべての事業と業務のロードマップであり、かつ政策文書として、2023~2033年の10カ年計画のマスタープラン策定に至りました。

## ペトラ博物館建設から観光マスタープラン策定に至る支援を経て、世界遺産であるペトラの現在地

### —— お二人から見たペトラの将来像についてお聞かせください。

（大山）ペトラはUNESCOの世界文化遺産に登録されたことによって、来訪者が増加し、より多くの人にペトラを知ってもらう機会に繋がりました。そして新たなペトラ博物館の建設と活動の展開は、地域のアイデンティティにもつながる、ペトラ地域のナバテアの歴史や文化の再認識に貢献し、さらに地域住民主体の観光マスタープランを策定することで、持続的で広域な地域発展への展望が拓けたと言っていいでしょう。

（熊田）しかし世界遺産登録の裏では、例えばペトラ遺跡の一带にかつて住んでいたベドゥールという部族は、遺跡の公園化に伴い、ペトラ遺跡の谷の上のウム・サイフンの集落への移転を余儀なくされたと聞きます。一方でペトラ遺跡公園を管理している行政からすると、彼らは公園内で観光客向けのロバ引きや土産物の販売で生計を立てていますが、中にはライセンスを持っていない営業もまた問題視しています。

（大山）ベドゥールを含めた地域の人々の生活文化は、ペトラ地域に古くから残る伝統的な文化の一部であり、それこそ同じUNESCOにより登録された無形文化遺産である「ペトラとワディ・ラムにおけるベドゥ（遊牧民）の文化的空間」の一部でもあります。

伝統的な生活の中で継承されてきた無形遺産をグローバル化の中にある現代にあってどのように次世代に伝えていくかは今後の課題でもあると思います。また、例えば冬の雨水の有効活用など、地域の

▼ 熊田氏と地域住民等との打ち合わせ



自然環境を有効に持続的な形で活用する伝統的な知恵からは、今日のSDGsの観点から学べる部分も多いかもしれません。

(熊田) 地域の自然・文化遺産は地域住民のアイデンティティの確保とともに、実利として経済的なメリットを地域全体にいきわたらせるポテンシャルがあります。これはペトラにおいては地域の願いであって、遺産も適切な観光地管理や経営の下で、来訪者によって活用されることを常にバランスよく考えていかないと、廃れていってしまうでしょう。私たちはこうした課題に対処するため、文化振興・観光振興など、様々な手法を活かして地域内外の関係者や来訪者と協力していかなくてはならないと思います。



▲ペトラ博物館前で

### 編集後記

ペトラにおける観光開発マスタープランは「WE ARE PETRA」と題され、誰一人取り残さないというメッセージを込めたスローガンにしている。そしてこのマスタープランで掲げたビジョンは、「ナバテアのアイデンティティをまもり、観光客を心から歓迎することによって、唯一無二のデスティネーションとなる」としている。ペトラ博物館建設も観光開発マスタープランも、JICAの支援あってこそそのものかも知れないが、そこには地域住民の主体性を重視し、その歴史や文化を尊重してきたことに大きな意義があるのだろう。世界遺産は登録がゴールなのではなく、地域の文化や自然を守るためのスタート地点に他ならない。世界遺産登録を機に地域の大切なものを見つめ直し、内外の協力を得てそれらを持続的に守り、伝えていく。その過程そのものに世界遺産登録の本当の意味があるのかもしれないと、本取材を通して感じる事ができた。

### 大山晃司



元JICA専門家、国士舘大学21世紀アジア学部非常勤講師。長らくJICA専門家として、ヨルダンのペトラ博物館や、世界遺産サルトでの歴史民俗博物館やエコミュージアム、またヨルダン博物館、カラク考古博物館、死海博物館等の博物館開設準備や運営活動支援等に携わってきた。2021年にJICA理事長賞受賞。NHK-BS「英雄たちの選択スペシャル ローマ帝国 vs. 驚異の砂漠都市」、TBS「世界遺産 ペトラ」など、ペトラやヨルダンに関する番組等にも協力。

### 熊田順一



株式会社JTB 国際関係統括 シニアディレクター。入社以来30年にわたり訪日/グローバル旅行事業に従事。訪日事業においては欧米豪市場における商品企画およびオペレーションを統括。元国連世界観光機関アジア太平洋地域担当シニアオフィサー。国際協力機構専門家としてヨルダン・ペトラ地域の観光マスタープラン策定を統括。さらに、Japan Sustainable Tourism Initiative常務理事として持続可能な観光の推進に取り組む。国際観光政策、官民連携、データサイエンスに基づく観光戦略設計に精通。横浜市立大学大学院データサイエンス研究科修士（データサイエンス）。

### 関連情報

- JTB総合研究所「【特別寄稿】“Tourism×博物館”～博物館が持つ、地域の自然・文化遺産に根差した観光への可能性  
<https://www.tourism.jp/tourism-database/column/2023/03/tourism-x-museum/>
- 独立行政法人国際協力機構「ヨルダン「ペトラにおける観光開発マスタープラン」が完成 : UNESCO世界文化遺産ペトラの持続可能な観光開発を支援  
[https://www.jica.go.jp/information/press/2024/20241210\\_31.html](https://www.jica.go.jp/information/press/2024/20241210_31.html)
- ペトラにおける観光開発マスタープラン  
<https://openjicareport.jica.go.jp/pdf/12376950.pdf>

制作：世界遺産検定事務局